

# 現代福祉学のパースペクティブ

A Perspective in the Contemporary Welfare

齋 藤 繁  
Shigeru SAITOH

## 要 旨

福祉問題は地球上に人類が誕生した時から存在していたことは確かな事実であろう。そして社会福祉学が独立した学問分科として成立したのは、およそ20世紀に入ってからの通説である。

社会福祉学が社会科学的方法を主軸としながらも、人文科学、自然科学の知識、方法を援用することなしには現実的な問題解決には至らないことは明らかである。

生命維持と人生における幸福感の探求は社会科学の枠組みを超えた問題であり、必然的に生命科学、医科学、精神科学などの参加が求められるのである。暮らしは貧しくとも思いは高く、とする言葉に象徴されるように、生活基盤の充足が全てではない。精神的充足が幸福感を生み出す源泉であることを改めて再認識したい。

社会福祉学が社会科学とりわけ政治学、法学、行政学、経済学などの枠組みに依拠しながら、その補完的役割にとどまる限り、独立した科学として位置づけは困難であると思われた。本稿において、今日の社会福祉学が未来科学として再編成を求められていると考え、新しい福祉学の展望を試みた。

## キーワード：

福祉国家 福祉学の視野 動物福祉と人間福祉 個人福祉と社会福祉 学際研究  
政策科学 ヒューマンサイエンス 人間学 グローバルな視座 ライフサイクル  
人間性福祉学への道 福祉支援とコミュニケーション

## はじめに

現代が社会福祉の時代と喧伝されて久しい。第二次大戦後の世界は福祉国家の建設を合い言葉としてきた。病者、貧民の救済に始まり、母子、高齢者、障害者などの生活支援、事故・災害、戦争犠牲者の援護などなど数え上げればきりがなほほど多岐にわたって課題が山積し、解決が待たれる現実がある。

わが国は現在862兆円の膨大な赤字国債を抱え、しかも2011年度国家予算には、さらに38.2兆円が見込まれていることから、財政破綻が目前に迫っていると考えられるのである。財政再建が行・財政政策の最優先課題となっていることは言うまでもない。バブルの崩壊、金融危機、失業者の増大、主幹企業工場の海外分散による労働市場の縮小化、そして子ども手当支給と年金・保険の見直し等は、いずれも庶民の生活に直結した問題であ

り、生活・労働福祉問題である。

現代社会福祉は公的な社会福祉行政措置を主体とするものから、社会福祉機関・施設と利用者との間で相互契約的關係に基づいて支援活動を行う、社会福祉基盤構造改革がなされ展開している<sup>1)</sup>。

社会福祉学は幼児童、女性、高齢者、障害者、生活困窮者などの制度的弱者ないし社会的弱者の支援を目的としている。そのための社会保障制度などの社会福祉制度、社会福祉支援方法・技術、社会福祉政策、社会福祉基盤とその構造・機能の研究を固有の課題としている。社会福祉学は個人の健康と生活要求、文化・社会的要求に答えていかなければならない。それ故社会福祉に関係する経済学、経営学、政治学、行政学、法学、医学、看護学、保育学、心理学、政策科学などのバックアップが必須であろう。わけても広範囲な国内外の福祉情報の蓄積と、長いあいだの福祉支援経験の累積記録と、時代に適合した福祉課題解決のた

めのストラテジが求められる。経験科学的実証主義が重要視されなければならない。

本論においては、現代社会福祉についてより巨視的な視座から社会福祉問題の展望を試み、すべての福祉問題が社会福祉学の枠組みに包摂可能かについて検討を試み、さらに現代コミュニケーション学と社会福祉問題の関わりについても考察を試みることにしたい。

## 1. 福祉学の視野

われわれは先ず福祉 (The Welfare) という包括的概念のもとに人間福祉と動物福祉とを区別する。両者は相互に関係し合っているが、比較的独立的に扱える研究領域であると考えられる。さらに、人間福祉 (Human Welfare) は人間性福祉 (Humanity Welfare) と社会福祉 (Social Welfare) とに大別されるであろう。前者は対象者のプライベートなアスペクトから、パーソナルな生活的状況を把握することにおいて、個人の尊厳、パーソナリティ、信仰、人生観、世界観などの個別性を重視し、自立した生活が維持できるように支援することを目指す。後者の社会福祉はパブリックな局面において、社会的葛藤の解決に重点をおくが、古くはM.E.リッチモンド (Mary E. Richmond, 1856-1939)、G.ハミルトン (Gordon Hamilton, 1892-1967)、F.ホリー (Florence Hollis, 1907-1987)らに代表されるであろう。

これは伝統的な個別的診断派と社会的機能派とに分けられる<sup>4)</sup>。現代的には社会生態学的考察から力動的な社会関係論の視座においてマンパワーの醸成と活用が考えられている。

人間と環境との関係論は、必然的に人間とは何か、環境とは何かという論議を原初的に惹き起こす。さまざまな福祉問題は社会福祉という概念的準拠枠組み (a frame of reference) に包摂しきれない多面的で複雑な要素を包含していると考えられる。人間の存在論、人間と自然との関係論、人間と人間との関係、即ち相互人間関係論はそれ自身が大きな課題性を含んでいる。

人間と環境との関係をミクロからメゾ、マクロへと循環するシステムとして、地域福祉 (Community Welfare) から国家、そしてよりグローバルな国際福祉にいたるネットワークを考

える視座もあるが、われわれは個人内部の精神世界を措定し、個人の環境への働きかけという視座から個人福祉 (Personal Welfare) を考えようとしている。換言するならば、人間学的認識 (Anthropological Understanding)、人間性心理学 (Humanity Psychology) などの視点を重視しているのである。

人間が集団生活を営む上で相互的な人間理解が前提となる。また危急に際してはすぐさま何らかの適切な支援をこころみななければならない。古来民間人による福祉サービス、奉仕活動は、近隣同士の助け合いであり、パブリックな福祉行政、公的扶助などとは区別される。このような地域的奉仕活動は、民間の社会事業 (Social Work) としての長い伝統と歴史があり、今日の社会福祉活動に引き継がれている。

われわれがうるわしい人間関係を形づくるためには、自己理解と他者理解とが前提認識となる。少なくとも自己理解には他者の助けが必要であるが、他者理解においても他者と自己との関係性の措定を欠くことができない。その上で、社会的共同ないし協働と社会的支援 (支持・援助) が成り立つと考えられる。社会的認識のためには、社会行動の集団力学 (Group Dynamics) に関する知識と経験、社会的技術が求められるであろう。

集団活動においては、言語的意思伝達 (Verbal Communication) が有効に作用する。そこでは言語の理解と表現能力が問題になる。対象者が適正で十分な言語的表現能力を持たない場合 (乳幼児、知的障害者、精神病患者、認知症者、虚言者など) には、必ずしも有用とは言えない。言語的コミュニケーションにおいては、絶えずノン・バーバルコミュニケーションが裏打ちされている。非言語的意思伝達はコミュニケーション行動において基盤をなしている。

なんと言っても福祉活動の前提として人間理解が重要である。それをごく一部の専門家に委ねるほかに道は無いと悲観的に考えることは早計であろう。たしかに医学的、心理学的、教育学の専門的判断が科学的、客観的な人間理解には欠くことができないとしても、伝統的、人間学的理解の仕方、だれでもが生来身に備わっている能力、人間性の一部であるはずなので、可能な限りにおい

て、なんらかの方法で「困っている人」を助けることはできるのである。人間の心情とふれあいと助け合いの精神は、人間の天性においてそなわっていると考えられるからである。

福祉学の学問的性格は、たとえて教育学のそれに類似していると思われる。現代教育学が人間教育に関する科学であり、教育目的を達成するために、教育領域における諸科学の援用を図るという学問的性格を帯びている。それゆえ教育哲学、教育心理学、教育社会学、社会教育学、教育史学、教育方法学、教育環境学、学校経営学、学校財政学等を総合するビックサイエンスとしての学際的学問分野の総称であると言える。

現代考古学も人文科学である人類史学に所属しながら、自然科学、社会科学分野の参与によりその科学性を補完しながら、独立した学問分野としての科学性をいっそう具有するという今日の状況がある。考古学の主たる目的は、先史時代人の生活と文化の探求にあったが、その方法論は古代、中世、近・現代にわたる遺物・遺跡の発掘までに及び、文献資料史学資料即ち史実の正当性と妥当性、信頼性に科学的証明を与え、現代の歴史考古学は歴史学研究においての補完的役割を見事に果たしているのである。

福祉学は果たして人間科学の一翼を担う独立した科学分野たりうるだろうか。前述したように福祉学は、人間科学に所属しながら、人生において不遇な状況におかれた人の支援のために、あらゆる社会資源を活用し、人々の自助・自立に向けて支援方法論を探求する科学である。言うまでもなく、福祉学の究極の目的は他科学同様人間の福祉であり、人間福祉を具現化するための方法学であると言えよう。そのためには、可能な限りにおいてあらゆる科学分野の知識、技術を活用しようとする。

福祉領域の問題解決にあたっては、それぞれ既存の専門科学分野の手をかりなければならない。仮にネーミングを試みるならば、福祉哲学、福祉倫理学、福祉宗教学、福祉教育学、福祉心理学、福祉史学、福祉社会学、福祉法学、福祉経済学、福祉経営学、福祉政治学、福祉行政学、福祉医学、福祉介護学、福祉看護学、福祉スポーツ学、福祉レクリエーション学、福祉工学、福祉情報学など

の名称呼称が浮かぶ。

福祉学が関係するあらゆる諸科学分野の知識、方法・技術の総合を図り、福祉問題を探求しようとするビック・サイエンスであると考えて、より現実的で具体的なアプローチを考えるとすれば、課題研究領域に関する試案として、現存するものも含めて以下の諸点が枚挙できそうである。

## A. 人文科学系福祉学領域

### 哲学的福祉学

(福祉哲学、福祉宗教学、福祉倫理学、福祉芸術学など)

### 人間の科学としての人間福祉学

(人間学的心理学、社会心理学、人類学的人間論、民俗学的人間論、医療人間論、医療福祉論、精神病理学、異常心理学、臨床心理学など)

### 福祉教育学

(福祉教育哲学、福祉教育史、福祉教育方法学、福祉教育課程論、福祉教育環境論、生涯福祉学習論など)

## B. 社会科学系福祉学領域

### 福祉社会学

(福祉社会学<sup>9)</sup>、社会生態学、福祉社会政策論、福祉社会思想史、社会病理学、犯罪社会学など)

### 福祉歴史学

(日本福祉史、西洋福祉史、東洋福祉史、国際福祉史、福祉文献学など)

### 福祉支援学

(福祉心理支援論、交流分析論、福祉ヒューマンサービス論、ソーシャルケースワーク論、スーパービジョン論、グループワーク論、母子福祉論、介護福祉論、高齢者福祉論、障害者福祉論など)

### 福祉行政学、財政学

(社会保障論、公的扶助論、福祉行政論、福祉財政論、福祉文書・簿記論など)

### 福祉経済学

(福祉労働経済学、福祉経済学原論、福祉経済史、福祉経済学史など)

### 福祉法学

(児童福祉法、精神保健に関する福祉法、知

の障害者福祉法、身体障害者福祉法、発達障害者福祉法、生活保護法、人権擁護論、古代・中世法典：リクルグス法典 ハンムラビ法典、世界の福祉法規、福祉法制史など)

#### 福祉経営学

(福祉環境論、福祉施設支援論、福祉施設管理運営論など)

#### 地域支援学

(コミュニティケア論、メガロポリス福祉論、過疎地域福祉論、在宅支援論、地域包括福祉センター論、ケア・マネジメント論、NPO論、NGO論など)

### C. 自然科学系福祉学領域

#### 医学・看護学

(生命科学論、医療福祉学、看護福祉論、保健福祉論、母子保健福祉論など)

#### 工学

(福祉情報科学論、福祉建築工学論、補装具論、福祉介助機器論など)

#### 環境福祉学

(自然生態保全論、動物生態論、動物行動学、動物福祉学、ガーデニング論、公害防止論など)

以上は恣意的に枚挙したに過ぎない。就中医療と環境福祉に関する分野について、ここではあまり触れられていないかもしれないが、医療と福祉との関係は車の両輪のように密接であり、特に母子福祉、障害者福祉、高齢者福祉において、医学とりわけ臨床医学、看護学との関わりが密接であり、かつ重要であることは言うまでもない。障害者福祉も同然であって、さまざまな分野による協働が必要である。

社会福祉学の固有の課題領域として乳幼児保育に関係する保育学は長い歴史を持っている。児童福祉の分野になると教育学、心理学とのかかわりが重視されることになる。少子高齢化の進行に伴い一層その重要性は増すてことは言うまでもない。生活基盤は経済問題が密接であり、仮に科学研究において物理学を王位につけるとするならば、経済学は女王の位置づけがなされるだろうとされ

た従前の喩えは別にしても、生活福祉においては経済学が果たす役割は大きく基盤をなしている。また生命維持においては医学が、そして人生の幸福の探求には哲学、心理学などの人文科学研究が基盤となるであろうことは疑いを入れない。

福祉学には、必要に応じて関係する科学分野の知識・経験を臨機応変に動員して問題解決を図るコーディネーターとしての役割が与えられる。社会福祉学、福祉学はそれ自身単一の独立した科学領域であるとは言えず、モザイク的に問題に直結する諸科学の知識・経験を集約して、応用科学的に現実的問題解決を試みようとする学際的仲介者としての性格を帯びる。福祉学は保育学において比較的に独自性を認めるが、政策科学からの社会福祉施策の研究においても、独自の社会科学的研究としての特性を見いだすことができるであろう。

先に述べたように、これら全てを科学研究の一分科としての社会福祉学の枠組みでとらえることはもはや現実的ではない。元来社会福祉は公的社会制度によって除外もしくは不十分な処遇より得られなかった人々の救済を意図したものであり、救貧・慈善事業の語に代表されるが、今日的には社会福祉問題の範囲が急速に拡大し、広範囲に及んでいることを認識する必要があるだろう。

現行における行政措置から利用者契約への転換にしても、政府の年金、医療費などの公的財政負担の困難から、消費税をはじめ国民保険、介護保険等の加入によって、応分の個人負担を求める自助・自立の方向に転換したに過ぎず、その背景要因としては国の巨大な赤字国債と、今後の財政見通しという問題が潜んでいると考えられるのである。

## 2. 人間性福祉学への道

人間性福祉学の視座は、上に述べたような自然科学的(医科学、環境科学)、社会科学(政治学、行政学、経済学、法学、社会学)、人文科学的(哲学、倫理学、宗教学、心理学、教育学、歴史学)視点を総合した科学的、ひいては人間科学的理解を前提にするとしても、なお個人の人間性の理解を重視し、そこから人々の個別的な福祉問題を探り当て、一人ひとりの社会的葛藤についての解決策

を見いだしていこうとする。課題は個人にとって有用な社会資源の活用と自助・自立への道の模索である。社会福祉学が社会構造や社会システムを問題とし、あらゆる社会資源を活用し、環境改善を図りながら問題解決を意図するのは対照的な立場にある。

あらゆる科学が究極において人間の福祉に貢献するものでなければならないことは自明の理である。社会福祉分野の業務に携わる人々が、その時々において必要とされる既存の知識・情報・経験を活用して問題解決を図ろうとするのは、身近な社会資源の有効活用とコーディネータとしての役割の遂行を意図するからである。

これまでの社会福祉学が社会科学の圏内にとどまって、社会競争や経済競争において不遇な、ないしはじめから制度の埒外におかれた不遇な人々の救済をはかりながら、なおかつ利用者の自助・自立を標榜し、問題を限定的に扱おうとするのに対して<sup>1)</sup>、人間福祉学とりわけ人間性福祉学の立場は、人間科学を背景として、個人の精神的内面や個人生活のなかに介入していき、人間的共感と共生をはかろうとするのである<sup>8)</sup>。

ここで社会福祉学が、人間社会の仕組みと機能を重視する限定された概念枠組みや論理システムを援用しながら人間社会における自由と平等を目指そうとするのに対して、人間福祉学はより巨視的、総合科学的視座において、飢餓、病気、貧困や災害などから、すみやかに人々の生存と安全の確保をはかり、人々の精神的安寧を目指すものでなければならない。これは人類史上において固有な人間的営為の現代化と言うこともできる。

さて、いかなる視座に立とうとも、危機的状況における支援活動に関して、われわれはいつも共通的認識を持っていることが望ましい。言うまでもなく、これは人間福祉における原点的課題の一つである。危機介入(Crisis Intervention)論とは、まさにそのような知識経験の総体である。いまや社会のいたるところでハザードマップや危機介入マニュアルが用意され、緊急事態に備える社会体制が整えられている。

従前は災害時の緊急出動は消防署、警察署、市役所、社会福祉事務所などの専断、特務事項であったものが、今日では各家庭、保育所はもちろ

ん学校、会社にいたるまで自主的防衛が求められる。お互いに声を掛け合いながら、基本的に自助自立を求められているのが現代である。改めて次節において現代福祉とコミュニケーション問題について考えてみることにしたい。

### 3. 現代福祉とコミュニケーション

いささか迂遠になるが、語義の詮索からはじめよう。Communicationの語源はラテン語のcommum (is)「共通」という語幹にic (us) とatus及びionが加わってできた。本来は「共通なものとする」であったが、転じて「人間と人間との間に共通性を打ち立てる行為全般」を意味するようになった(井口, 1982)という。ほかにラテン語のcommunicare「共通項」からきているという意見もある<sup>6)</sup>。

英和辞典には伝達、報道、コミュニケーション、伝染、通信、情報、消息、手紙、文書、連絡、交通、交際、親密な関係などがある。名詞形でなく動詞形だとcommunicateとなり、訳語には、伝達する、通報する、分かち合う、交換する、伝える、通ずる、感染させる、うつす、交際する、交通する、連絡がある、通じているなどがあるが、これは「commonにする」と同義になる。

commonは、共通である。共同である、同じである、一般的である、広く分かち持たれている、月並みである等の意味があるが、さらにこれにはcommon man (一般人、庶民)、common sense (誰でも持っている感覚、共通感覚)、転じて「常識」の意となった。

コミュニケーションという言葉は、複数の人々の心の扉が開かれてまっすぐな一本の線で結ばれ、一体化し合一することを求めるといった含意を持つことになる(後藤, 1999)という意見もある。

社会学、心理学においては、一般的に「伝達」の訳語が使われているが、心理学ではかつて人間相互の「意志伝達」の訳語が長く当てられていた経緯がある。マス・コミュニケーション隆盛の時期と同期するかのように「意思伝達」の訳語と入れ替わり、つまりwillだけでなく、広くwill and thinkingを含意するようになったのである。

大衆伝達(Mass Communication)は、いまや現代文化を象徴する文明の旗手と言える存在であ

る。新聞・雑誌、出版、テレビ、ラジオ、CD、DVD、映画、演劇、携帯電話、パソコン・ネット通信などは、すべての現代人にとって欠くことができない情報通信手段である。携帯電話をはじめ、ネット通信、宇宙通信などの情報伝達の方法は絶えず進化を遂げており、いまや現代社会はコスミズムとグローバリズムの時代と呼ぶにふさわしい。

かつての対面集団 (face to face or man to man) による情報交換方式が、情報媒体が仲介する一方通行のやり方で、瞬時にさまざまな情報収集が可能になった。最近は双方向式で応答できるテレビやテレビ電話が開発され実用に供されている。しかし、便利になった反面、サーバーによる情報のコントロール、プライバシーの侵害、匿名性、虚偽情報、伝達情報の信憑性など新たな問題も生じている。

ここで、あらためてコミュニケーションの用語の定義を整理しておきたいと思う。この用語は上述のようにそれ自体が多義的で学術的にも多様な論議があり、一定していないが、「相互作用のプロセス、観念、意志、思考内容の伝達、相互作用過程を含む作用過程」として特徴づけられるかもしれない。林 (1988) は「本質的に他者を志向し、他者との相互作用である。孤立的な個人の記号行動や情報行動とは異なり、たんに情報や意味が伝達される過程ではなく、人間相互の意味交換の活動である。」としている<sup>7)</sup>。

情報処理理論によって、コミュニケーションを情報の送信と受信ないし刺激-反応の繰り返しのプロセスとして機械的にとらえると、「送り手としての個人が、受け手としての他者の行動を変容させるための刺激 (言語信号、映像・音声) を伝達するプロセスである。」となる。

相互作用を重視した定義は、「他者を理解し、かつ他者からも理解されようとする過程で、状況全体の働きに応じて、ダイナミックで、常に変化する動的なものである。」としている。また、情報媒体 (Information Media) が、記号として一定の意味を担い、その意味を相手に伝えようとするプロセスがコミュニケーションであるとする見解は、「記号を選択・創出・伝達することによって、伝達者と同じ意味を受け手が知覚できるようにす

る過程である。」とする。

コミュニケーションが、古代ギリシアの弁論術やレトリックのように相手の感情や思考、意志に訴える修辞法を含むと考える立場もある。それによると、「ある特定の場面・状況の下で、個人がメディア (媒介手段、媒体) を選択した上でシンボルを駆使し、意図されたある特定の目的を達成するためにする行動である。」とされる。

#### 4. 福祉支援におけるコミュニケーション

福祉における伝達は福祉分野のあらゆる社会活動 (Social action) と関係する。福祉サービスは人間に関する限り Human Service とも呼ばれるが、これは社会福祉活動の中心的概念であり、なおかつ社会事業 (Social Work) の中核を成す概念でもある。社会福祉支援技術とは社会福祉サービスのための専門的支援活動とその方策のことである。

社会福祉支援技術の基本原理に従い、優れた支援関係を構築し、それをエンパワーメントへと高めていくためにも、配慮された巧みなコミュニケーションの方策が望まれるのである。さらにまたエコ・システムへのアプローチ (生態学的認識とシステム思考の統合による接近) を客観的事態認識に立ち、なおかつ社会・倫理学的原則に従いながら、グループ・ワークやコンサルテーションを効率よく効果的に行うためにも、言語的、非言語的意思伝達の方法は欠くことのできない有用な方法になるのである。

福祉支援である限り、温かく人間的なアプローチでなければならない。表と裏、建前と本音とを巧みに使い分けるやり方は、本来の福祉カウンセリングとは言えない。ビジネスライクな言動・態度や感情脱失的な態度はもちろん、無感動で機械的、教条主義的言動も、さらにはお為ごかしも、上手をつくることも許されない。手慣れた事務的、職業的言動はクライアントを失望させるだけであろう。

ひるがえって、人間は人間間的存在であり、本来人と人との間は空虚な空間なのではない。社会心理学的には、人と人との間にはいつもあるテレ (対象に投影された感情のようなもの、tele) が働

いていて、相互に影響し合っていると仮定できる。それで、人と人との間に存在するということから「人間」というコンセプトが成立することになる。それ故、われわれは人と人との間に実在する社会的存在として、個人のパーソナリティを特徴付けることができる。人を包む生活空間は無機的空間ではなく有機的意味空間なのである。

存在論、認識論からは、人の生涯は一日一生、一回性、排他性、世界内存在という特質をもつ実存的存在であるとする見解もある。このように人間についての本質的な認識なしには、われわれのコミュニケーションは仮性のロボット・コミュニケーションになるか、事実上非人間的コミュニケーションと化してしまうかもしれない。

人間に対する深い洞察なしには適切・妥当なアプローチは可能にならない。いくらテクニックを弄し、表層的に装ってみせても、むなしく徒手空拳に終わるのであろう。前提的に正当な人間認識を欠いてはコミュニケーションの空洞化は避け難いであろう。自己認識もままならないでいるのに、他者認識までも手が届かないとか、「人間いわく不可解」と投げ出してしまふ危険性は、つねにわれわれのうちにあるのかもしれない。

他我への接近、これこそ福祉問題の起源といえるのではないか。生活が困窮し、危機に瀕している他我の救済、これはまさしく社会福祉支援サービスである。一人ひとりのおもいを真摯に受け止め、具体的な解決方策を共に案出していかねばならない。決して人ごとのようにではなく、わがことのように「共に泣き、共に喜ぶ」精神が、救いをもたらすであろう。

## むすび

本稿は、現代の福祉問題のすべてを社会福祉学が所属する社会科学の範疇に包摂し難いのではないかという疑問から出発している。社会福祉学を独立した単一科学とみなさないで、諸科学の経験的知識や技術を総合する方法学とみなすことによって、福祉問題の解決方策を模索し、新しい地平を展望しようとしたものである。福祉学を人間福祉学と動物福祉学とに二分する仕方が妥当であるかどうかは、なお検討の余地を残している。わが国ではいささか馴染まないかもしれないが、

ネット上で見る限り、海外では一般的であるようだ。このことは、自然生態学と社会生態学との対比から環境福祉学という新たな分野の問題を提起することになるであろう。いまや喫緊の現代的福祉課題として、地球環境や宇宙環境と人類福祉というグローバルな視座に立つことが求められている。

福祉学が相対的に独自性を主張できる側面があるとするならば、それは保育学においてであるかもしれない。また、より身近に関心が持たれる研究課題領域は、政策科学における社会福祉政策の探求であろう。福祉学が医科学、精神科学、人間科学、政策科学など多くのピックサイエンスとも密接に関わり合っていることを銘記したい。

## 文 献

1. 阿部志郎、土肥隆一、河幹夫 新しい福祉と理念—社会福祉の基盤構造改革とは何か— 中央出版 2001年
2. 一番ヶ瀬康子、伊藤隆二監修 現代の社会福祉 一橋出版 1998年
3. 南條文雄 現代の人間学（序説）—哲学・社会学的探求— 北樹出版 2002年
4. Richmond, M.E. WHAT IS SOCIAL CASE WORK? New York, Russell Sage Foundation, 1922 (杉本一義訳人間発見と形成 出版館ブック・クラブ 2007年)
5. 齋藤 繁 福祉考現学序説 弘前学院大学大学院社会福祉研究科 社会福祉学研究 第2号 47-57頁 2007年
6. 齋藤 繁 危機介入におけるコミュニケーション 弘前学院大学社会福祉学部研究紀要 第9号 21-27頁 2009年
7. 末田清子、福田浩子 コミュニケーション学—その展望と視点— 松柏社 2003年
8. 杉本一義 人生福祉学の探求 永田 文昌堂 2003年
9. 福祉社会学会編 福祉社会学研究1 東信堂 2004年